

私達の教会では日本聖公会全体で定められているもの、教区で定められているものを含めていくつかの記念日が定められており、その日の信施を全部その目的のため、代祷と共にささげることになっております。こうした信施奉獻は日本聖公会の総会や北関東教区の教区会で決められますが、信施を献げる機会が多すぎるのではないか、どの教会も経済的に大変なのに、さらに苦しめるような記念日を増やすのか…。という議論がなされます。決して豊かではないにも関わらず、何故こうした協力を考えていかなければならないのでしょうか。

エルサレムの近くに死海という湖があります。これは琵琶湖の一・五倍程の面積を持つ湖ですが、海面下四百メートルにあって世界一低いところにある湖なのです。そういうわけで、死海に流れ込む川はいくつかあるのですが、死海から流れ出る川はひとつもありません。川は水と共に岩に含まれている塩分を一緒に運んできますが、水は蒸発していくのに対し塩分は蒸発しませんので、湖の塩分はどんどん高くなってしまいます。現在死海の塩分は海の約十倍、季節によっては塩の固まりがあちこちに浮いているそうです。また濃い塩分濃度のためどんなに泳げない人でも簡単に浮くことが出来るそうです。このような様子からもうおわかりのように、死海には生物が生息しておりません。塩分濃度が濃すぎて生きることが出来ないのです。死海という名前はこのように、生き物が生息出来ないことからつけられた名前なのです。

この事実は、今日の教会に対して大変示唆にとんだ指摘をしてくれます。受けるほうが与えるよりありがたい、受けられるものはなるべくたくさん受けておきたい。そのように考えていて、与えることを考えない教会には命がないと言っているのです。いつも受け身であり、自分に与えられているものの中からささげることをしてしない教会は命がないばかりか死んだ存在であると言っているのです。ささげるといことは、私達が損をすとか、自分も欲しいのにしぶしぶ仕方なくするものではなく、自分の命のため、教会の命のため、そして私達がかかわろうとしている人々と共に私達自身もまた豊かにされることであるのです。与えることをしないで死んだ存在になるのではなく、ささげることによって共に豊かになりなさいということなのです。

本日の福音書は有名な五つのパンと二匹の魚で五千人が養われた奇跡物語でした。

主イエスと使徒たちは舟に乗って人里離れたところへ向かいました。ところが群集はそれと気づき、すべての町からそこへ一斉に駆けつけて、舟が着くより先に到着したのでした。その様子は飼い主のいない羊のような有様で、舟から上がられた主イエスは深く憐れまれたと記しています。

時もだいぶたち、弟子たちは主イエスに、群衆を解散させるように言います。弟子たちは群衆に今食事が必要であることを分かっていたましたが、それは各自の責任ということにし、自分たちは関わりたくなかったのです。

それに対し主イエスは、「あなたがたが彼らに食べ物を与えなさい」と言われました。驚いた弟子たちは「わたしたちが二百デナリオンものパンを買って来て、みんなに食べさせるのですか」と、自分たちの力でどうしてこれだけの人を満腹させることが出来るだろうか、と自分たちがようやく手にいれた五つのパンと二匹の魚を手にして言ったのでした。そこで主イエスは五つのパンと二匹の魚ですべての人を満腹させる奇跡を行われたのです。

もともとあったものは本当に少ない、五千人の人々には何にもならない五つのパンと二匹の魚だったのです。しかしそれによってすべての人が養われた、全ての人々が満腹した。食べ残しが弟子の持っていた籠全部に一杯になったというのです。これは主イエスの愛が全ての人を満たしたということです。それがどんな小さなものであったとしても、主イエスによってそれが御心にかなうものとされ、大きな愛の力になっていくというのです。私達も小さい力かも知れませんが、自分たちの力に依じてささげていくということは、私達自身の、そして私達教会の命にかかわる問題だということをよく覚えておきたいと思いません。

世界で最初に誕生した教会はエルサレム教会です。そして二番目に誕生したのがアンテオケ教会でした。アンテオケ教会はエルサレムから遠く離れ、規模も小さいものでした。ところが、ある時エルサレム地方で飢饉があったとき、弟子たちはそれぞれの力に依じて、ユダヤに住む兄弟たちに援助の品を送ることに決め、そして、それを実行し、バルナバとサウロに託して長老たちに届けたとあります。小さな教会が大きく立派なエルサレム教会が困っているとき、力に依じて助けたということです。アンテオケ教会はまだまだ小さく力も弱く、それまでエルサレムの教会から助けられることはあっても、助けることなど考えられもしませんでした。しかし飢饉というひとつの出来事を通して、アンテオケの教会はささげることを選び、さらに豊かさが増し加えられたのでした。やがてアンテオケ教会はエルサレム教会より大きくなり、ついにエルサレム教会を吸収するまでに発展しました。それまでには歴史上の様々な出来事もありましたけれども、アンテオケ教会がささげることによって主なる神の祝福を受け、さらに豊かにされていったのは間違いのないことでした。

本日の日本聖公会青年活動のための日に当たりまして、またこのような機会に接する度に、これが実は主なる神の恵みへの招きであることをよく考えてみたいものです。